

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：33906

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(A））

研究期間：2019～2023

課題番号：18KK0331

研究課題名（和文）アフリカ大型類人猿の保全と地域開発の統合に向けた研究成果の国際発信と社会実装

研究課題名（英文）Integration of the Conservation of African Great Apes with Local Development: Practices for International Dissemination and Social Implementation

研究代表者

松浦 直毅（Matsuura, Naoki）

椋山女学園大学・人間関係学部・准教授

研究者番号：60527894

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 8,600,000円

渡航期間：3.5ヶ月

研究成果の概要（和文）：コロナ禍による研究開始の遅延と計画変更はあったが、2022年度と2023年度に調査対象国であるガボンとタンザニアに複数回渡航して、人と大型類人猿の関係にかんする調査を深めるとともに、保全と開発の統合をテーマに、地域住民を対象にした現地ワークショップや現地の関係機関との議論をおこなうことができた。また、フランスとイギリスに複数回渡航して、関係する研究機関を訪問して研究交流を深めるとともに共同研究を進め、国際学会やシンポジウムでの発表もおこなった。論文3本、図書4件、国際学会発表5件などの成果が得られ、自身の研究を広く国際発信し、国際的な研究ネットワークを構築することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ガボンにおけるゾウによる獣害と被害対策の実態を示した研究は、サバンナゾウにかんする研究が多かったなかで、森林景観におけるマルミミゾウに着目している点で新奇性が高い。DRCにおける地域開発をめぐる実践は、研究者も活動に深く関与し、住民との協働によって保全と開発の両立を図るといった先進的な事例といえる。タンザニアにおける研究では、コロナ禍や気候変動、インフラ整備など、最新の社会的変化をふまえている点で意義深い。

研究成果の概要（英文）：Although there were delays in starting the research and changes to the plan due to the COVID-19 pandemic, I was able to make several trips to research sites in Gabon and Tanzania in FY2022 and FY2023. I deepened my research on the relationship between humans and great apes and organized workshops for local people, as well as discussions with relevant local institutions under the theme of integrating conservation and development. I also traveled to France and the UK several times to visit relevant research institutions, which enhanced research exchanges and facilitated joint research efforts. Additionally, I made presentations at various international conferences and symposia. The outcomes of this research included three papers, four books, five presentations at international conferences and symposia. These activities have enabled me to disseminate my research widely on an international scale and to build a robust international research network.

研究分野：人類学

キーワード：アフリカ 大型類人猿 生物多様性保全 持続可能な開発 住民参加

1. 研究開始当初の背景

アフリカの生物多様性保全は重要な国際課題であり、なかでも脆弱性が高い大型類人猿の保全は緊急を要するが、有効な保全体制が整っている地域はほとんどない。生息国の政情不安や経済の停滞にくわえて、保全政策と住民生活の軋轢が大きな障害となっているからである。このような軋轢を解消するには地域の社会経済開発を推進することが不可欠であり、そのためには、地域によって異なる文化的背景や社会的文脈を十分に理解したうえで、それをふまえて保全と開発が両立する体制を構築することが必要である。

そこで、本研究の基課題「人と動物の共存の文化的基盤にもとづくアフリカ大型類人猿の保全と地域開発の統合」(若手 A・2017~2022 年度) では、大型類人猿の重要な生息地であるとともに、長期野外研究拠点でもあるアフリカ中部の三つの自然保護区(ガボン: ムカラバ・ドウドゥ国立公園、コンゴ民主共和国: ルオー学術保護区ワンバ、タンザニア: マハレ山塊国立公園)において、地域に根ざしたボトムアップの視点から、類人猿の研究と保全が統合的に発展し、将来にわたって地域の持続的開発にも資するような新たな保護区運営システムを提案することを目指した。三つの自然保護区において、地域住民と類人猿の共存を支える文化的基盤、研究が地域にもたらす影響、保全と開発に関わる諸アクターの関係がそれぞれ明らかになり、いずれの地域にも共通している点と地域ごとに異なる点が見出された。また、その結果をもとに、類人猿の研究と保全が統合的に発展し、将来にわたって地域の持続的開発にも資する保護区運営システムを提案した。従来のように「研究」と「実践」を分けるのではなく、両者が一体となって発展するための仕組みを取り入れ、関係する諸アクターが有機的に連携・協力することの必要性を指摘した。

2. 研究の目的

以上の基課題の成果をふまえて本研究では、ヨーロッパの関係機関および調査国のおもな研究機関を拠点とした活動を通じて、基課題でえられた人類学的研究の成果を幅広く国際発信することと、生物多様性保全に関わる諸機関の関係者とのネットワークを構築し、基課題の研究成果の有効な社会実装を進めることを目的とする。また、現地研究機関の協力を得て、調査地において地域住民を対象としたワークショップをおこない、基課題の成果を調査地に還元するとともに、地域住民の意見を社会実装に取り入れることを目指す。

3. 研究の方法

パリ自然史博物館(フランス)やスターリング大学(イギリス)をはじめとするヨーロッパの関係機関において資料収集するとともに、関係者と議論をおこなう。あわせて学会やセミナーで発表して、これまでの研究の成果を広く共有する。調査地であるガボンの熱帯生態研究所とタンザニアの野生動物研究所のそれぞれにおいて、情報収集や研究打ち合わせをおこない、政府関係者、NGO、地元研究者らをまじえたセミナーをおこなう。さらに、研究成果の調査地域への浸透を目指して、ガボンとタンザニアにおいて関係機関と協力し、それぞれの調査地において、地域住民をまじえたワークショップを開催する。

4. 研究成果

当初計画では 2020 年度と 2021 年度に海外渡航をして研究を達成する予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大のためすべて中止となった。そこで 2020~2021 年度は、関係者とオンラインで研究成果の共有をおこなうとともに、これまでに蓄積したデータの分析、国内の学会等での発表、論文の執筆に努めた。

2022 年度から海外での活動を再開することができ、2022 年 8~9 月にガボンとタンザニアに渡航して、関連する情報を収集するとともに、現地の研究機関、政府関係組織、NGO などに向けて研究成果の発信をおこなった。またガボンでは、国際ゾウの日にあわせて開催された人とゾウの関係に関する国際シンポジウムに参加し、ゾウによる獣害と住民による対策の状況について発表した。2022 年 12 月~2023 年 1 月に再度ガボンに渡航し、調査地において地域住民に向けたワークショップをおこなった。2023 年 1 月には、研究協力者らとともにイギリスのスターリング大学を訪問し、Kate Abernethy 教授をはじめとする研究チームと共同研究の議論をおこなった。

最終年度となる 2023 年度は、海外での発表を中心に学会やシンポジウムでの発表を重点的におこない、英語論文の作成にも努めた。5~6 月に日本アフリカ学会と日本文化人類学会、7 月にルワンダ(キガリ)で開催された第 31 回国際保全生物学会でそれぞれ発表した。

8 月はガボンとタンザニアで関係者との打ち合わせや現地ワークショップをおこない、研究成果の社会実装を進めた。10 月にはフランスとベルギーで関係者と打ち合わせるとともに、カメルーン(ヤウンデ)で開催された国際シンポジウムに参加・発表した。11 月にはフランス(パリ)で開催された森とゾウに関する国際シンポジウムで発表するとともに、関係者との意見交換をおこなった。さらに、12~1 月にはガボンで関係者との打ち合わせや最終成果報告をおこない、2 月にはタンザニアでおなじく関係者との打ち合わせや最終成果報告をおこなった。

以上を通じて、学術誌論文 3 本(英語 2、日本語 1)、主編著 1 本、分担執筆 1 本、事典項目 1

本、国際学会発表 6 件、国内学会発表 4 件、招待講演 2 件などの成果が得られた。論文として、アフリカの野生動物保全をめぐる状況をまとめた日本語総説、ガボンにおけるゾウの獣害の状況と住民の認識についての英語論文（共著、責任著者）、おなじくガボンにおけるゾウの獣害の影響と住民による被害対策についての英語論文（共著、筆頭・責任著者）を発表した。

書籍として、コンゴ民主共和国における開発と保全の実践に関する編著書を出版し、おなじくコンゴ民主共和国の調査地における 50 年の研究成果をまとめた英語書籍のうち 1 章を担当した。

全体として、コロナ禍による中断や異動にともなう渡航可能時期の制限があったため、当初予定していた在外研究は実施できなかったが、精力的に海外で活動をすることができ、大きな成果を残すとともに研究ネットワークを拡大することができたといえる。現地の関係機関との交流を深め、研究成果の社会実装を進めることができ、調査地への成果還元もおこなうことができたことから、今後のさらなる研究の発展が見込めることとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 松浦直毅・戸田美佳子・安岡宏和	4. 巻 100
2. 論文標題 アフリカの生物多様性保全をめぐる歴史と現代的課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アフリカ研究	6. 最初と最後の頁 29-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Terada Saeko, Yobo Christian Mikolo, Moussavou Guy-Max, Matsuura Naoki	4. 巻 14
2. 論文標題 Human-Elephant Conflict Around Moukalaba-Doudou National Park in Gabon: Socioeconomic Changes and Effects of Conservation Projects on Local Tolerance	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Tropical Conservation Science	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/19400829211026775	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Matsuura Naoki, Nomoto Mayuko, Terada Saeko, Yobo Christian Mikolo, Memiaghe Hervé Roland, Moussavou Guy-Max	4. 巻 5
2. 論文標題 Human-elephant conflict in the African rainforest landscape: crop-raiding situations and damage mitigation strategies in rural Gabon	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Frontiers in Conservation Science	6. 最初と最後の頁 1356174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fcosc.2024.1356174	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 3件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 野本繭子・寺田佐恵子・松浦直毅
2. 発表標題 ガボン共和国ムカラバ・ドゥドゥ国立公園周辺におけるマルミゾウの作物被害による住民の暮らしの変化
3. 学会等名 日本アフリカ学会第59回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松浦直毅
2. 発表標題 地域文化に根ざしたアフリカ熱帯林の生物多様性保全：ガボンにおける研究と実践
3. 学会等名 文化遺産国際協力コンソーシアム第18回アフリカ分科会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Naoki Matsuura
2. 発表標題 Une etude integree sur les conflits hommes-elephants autour du Parc National de Moukalaba-Doudou au sud du Gabon
3. 学会等名 Conference sur la coexistence homme-elephant de foret (2eme edition) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 寺田佐恵子・松浦直毅
2. 発表標題 ガボン共和国ムカラバ・ドゥドゥ国立公園周辺地域における地域住民の野生動物保全に対する認識：アフリカゾウによる被害と国立公園からの利益の影響
3. 学会等名 日本アフリカ学会第57回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松浦直毅・仲澤伸子
2. 発表標題 タンザニア・マハレ山塊国立公園周辺地域における住民生活の動態：インフラ整備、自然災害、コロナ禍の影響
3. 学会等名 日本アフリカ学会第60回学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松浦直毅・野本繭子・大坂桃子
2. 発表標題 人と動物の軋轢がひきおこす地域コミュニティの崩壊：ガボン共和国におけるシンリンゾウによる畑被害の影響
3. 学会等名 日本文化人類学会第57回研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Matsuura, N. Terada, S. Nomoto, M. Osaka, M. Yobo, CM. & Moussavou, GM
2. 発表標題 An integrated study on human-elephant conflict in rural Gabon
3. 学会等名 31st International Congress for Conservation Biology (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Matsuura, N.
2. 発表標題 Ecotourism development and changes in local communities in Gabon
3. 学会等名 International Symposium "Tourism, Development, and Conservation in Africa (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松浦直毅
2. 発表標題 人類学的フィールドワークの楽しさと苦しさとの強さ
3. 学会等名 日本心理学会第87回大会・大会企画シンポジウム「長期フィールドワークを支えるこころの働き」(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Matsuura, N.
2. 発表標題 Community-based conservation and local development practices in Gabon and DRC: An implication for the COMECA project
3. 学会等名 International Conference "Co-creation of innovative forest resources management combining ecological methods and indigenous knowledge (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Matsuura, N. Nomoto, M. Osaka, M. Terada, S. Yobo, CM. Moussavou, GM. Moukagni, LL. Memiaghe, HR. Diop Bineni, TR. & Ngama, S
2. 発表標題 An integrated study on human-elephant conflict in rural Gabon
3. 学会等名 Symposium Forests and Elephants (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 阿部健一・柳澤雅之編 (松浦直毅)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 296
3. 書名 No Life, No Forest: 熱帯林の「価値命題」を暮らしから問う (第1章: 「しなやかさ」と「はかなさ」のはざままで揺れ動く生のかたち 中部アフリカ, パボンゴ・ビグミーの社会変容の経験から pp.13-36)	

1. 著者名 松浦直毅、山口亮太、高村伸吾、木村大治	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 280
3. 書名 コンゴ・森と河をつなぐ: 人類学者と地域住民がめざす開発と保全の両立	

1. 著者名 Furuichi T, Idani G, Kimura D, Ihobe H, Hashimoto C. eds. (Matsuura, N & Yamaguchi, R)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 589
3. 書名 Bonobos and People at Wamba: 50 Years of Research (Empowering local associations for sustainable local development: the case of a collaborative project in the Wamba region pp.399-417)	

1. 著者名 日本霊長類学会編 (松浦直毅・徳山奈帆子)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 752
3. 書名 霊長類学の百科事典 (第9章: キャパシティ・ビルディング pp.510-511)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
アコモ・オクエ エチエンヌ (Akomo Okoue Etienne)	ガボン国立科学技術センター・熱帯生態研究所・副所長	

6. 研究組織（つづき）

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
ケユ ジュリウス (Keyyu Julius)	タンザニア野生動物研究所・研究部・部長	
アバーナシー キャサリン (Abernethy Katharine)	スターリング大学・生物学・環境科学部・教授	
ルボマン シルヴィ (Le Bomin Sylvie)	フランス国立自然史博物館・人間・環境部門・生態人類学ユニット・准教授	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

ガボン	熱帯生態研究所			
タンザニア	野生動物研究所			
英国	スターリング大学			
フランス	自然史博物館			